



河圖  
合書印

秀山  
藏書

仰遊をんをたてしれをたてんれを遊  
ゆるあしかりせし中昔とハる程  
いれはるちのさる芭蕉を羽より始  
詩歌乃雅をいし風雅の心を俗  
多しあるありゆき詩経万葉集  
風舞をゆるしゆれは乃蕉翁此門  
ありあはれ方ありと道れありに  
系結さく乱れをありとありの  
束まありとありのありとあり

書庫

うらまをなめく 鏡は 蕉の羽は 一射は  
いづく 寧ろ 蕉の羽を 見るもよか 入るは  
長を ぬき 眼を みる 人此象と ぶは 地の  
尾を 押 尾を けく せん 漆 掃子 似り 笠 巾乃  
か かり ぬき せん せん かん 乃 象は けり ぬき かん  
か ぬき 明眼 乃 人の 南の 此象を 見  
大を ぬき へし 叔 蕉の 羽は 風 雅を けり せん ぬき  
後 蕉の 羽は ぬき せん せん 魚 多 此 ぬき せん  
多 此 ぬき せん せん 風 雅 乃 ぬき ぬき  
うらま ぬき せん せん ぬき ぬき ぬき ぬき

驚し かく 百年 此 今も 免て 身 ぬき ぬき  
邪 ぬき 風 雅の ぬき 根本 土 ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
自然の 姿 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
趣の ぬき ぬき 新 奇 ぬき 高 遠の ぬき ぬき  
片 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

いかににほひをきく人徳のふれ道  
をいひし親のへきをいひまじき無事  
わくありし言ひ傳へし  
佛のしん終身齋家此道者へ或ハ  
老佛をよむなりと見え高妙は説き  
若し此をいふはねき終道者言くせん  
とて却る志しる人の誠をひく仙文子  
とて此のふに佛語聖言よみし  
俗中の風雅を逃別は却るはるる

うのふれは雪の中庵夜半亭  
作はのふれは雪の中庵夜半亭  
いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは

いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは  
いっのせみささのふれは

つら〜と〜と〜と〜と〜と  
 此珠の花をわ〜と〜と〜と  
 とを〜と〜と〜と〜と〜と  
 あ〜と〜と〜と〜と〜と  
 きの〜と〜と〜と〜と〜と

君と月と〜と〜と〜と  
 ゆめれおめと〜と〜と  
 川のさよと〜と〜と  
 か〜と〜と〜と〜と〜と

蕨太  
 蕪村  
 今  
 大

唐のち〜と〜と〜と  
 秘曲は〜と〜と〜と  
 花〜と〜と〜と〜と  
 花日あ〜と〜と〜と  
 女もは〜と〜と〜と  
 川ハち〜と〜と〜と  
 羽ま〜と〜と〜と  
 五合を〜と〜と〜と  
 か〜と〜と〜と〜と〜と

筆  
 村  
 合  
 合  
 合  
 合  
 合  
 合  
 合  
 合

如きりあたく母のうり約  
 きのこりうとほりい  
 月をかかぬ一とつ春の候  
 花のこもち中庵のこつ物子  
 小舟つけららめのけ所  
 くらりしきりかきさあのか  
 ぬまの跡地引あきさ  
 傳きあちり袴短くして  
 いまの花の匂あ大系  
 合 合 合 合 合 村 合 合 合

流あつるるのこぼれの冷き  
 こぬまきりほり水きり  
 ちきありのちゆまぬらつこく  
 いそぬきりきりあきさ  
 仲のあめひりすちいひむい  
 花のりやまの鏡のぬきさ  
 大あの子んあきりあきり  
 いまの山のほりあきり  
 梅のりあきりあきり  
 合 合 合 村 合 合 合 合 大

ちきねも とうりくちねま 今  
 と草の乱らら 後ま 今  
 ちり つらこのちさ 今  
 やしこの花うれあふ 夜草ま 今  
 ちきねま 千44の出 今

右往來哥仙大に丸執行て  
 満ち〜

といかい備

秋之部

秋まぬ 目ま ち豆の〜  
 か〜 ちの馬  
 いせの鬼いせ けさ  
 ちのあ〜 ち  
 あさ〜 ちかしの

おもしろくしつらうもれけり  
おもしろくしつらうもれけり

長根哥之画

方士ちほしつらう

ちほしつらう

急ぎつらうもれけり  
方朝も母も何のひらけり  
かゝるちほしつらうもれけり  
かゝるちほしつらうもれけり  
七のつらうもれけり

金持の御前のまゝに

おもしろくしつらうもれけり

おもしろくしつらうもれけり

昔もあけつらうもれけり

七のつらうもれけり

かゝる徳のことつらうもれけり

一話く旧宝土曰一巻の書地と起承轉の  
又見岡志のつらうもれけり





目みこしをうかろん 西の  
浦しきりところのりつたまらり  
りやそへはるすたまりり  
一古子保段えの比を浪花の誹諧り  
さしきりり

鬼貫 戈丸 野坡 員九 伶々  
祗空 芳空 布門 昭簾 白羽  
法策 海音 矩川 瓢水 来山  
さしきりりさしきりり

さしきりりさしきりり

壬戌之秋七月既望 獲子與客後舟  
遊於赤壁之下

この月おちうまそおの月えりし  
西山の山

さしきりりさしきりり  
地をまらりりりりり  
おんの月おちうまそおの月えりし



尺加龜雨うたひら

ねらうれぬらやちのぬら

芦間り後りのうら

丹まき、室相や偏のふかのふら

はまのめ是万年のゆ、難

えくもの花ちさしにせあり

中元

人のかこもなごの中る確

中えの目おとちしものし

人うそ解あつたぬは信ち

ちさしちさしちさしちさし

尺加龜雨うたひら

春又見の土りさしす

かさしちさしちさしちさし

あつたぬは信ち

一白年さかしのうら

ののちかち村のちさしちさし

あつたぬは信ち



角力をして中々の川京のるお川  
かちの馬ちぬるおと守るる  
たてしおとくかせし

谷川うねぬるか〜あつたのよ  
ひしきさしひし〜つちつちつち  
まぬしきよのなつた

さらう角力ねてうねておらね  
さかぬもふさ

六尺あつしおぬもつら〜るる角力

あつら〜るるさつて

日つきのあつて〜た井川

あつら〜るるつちのさつて

あつら〜るる七尺のゆたか

おと江巖王のよと

はち須弥ありあま〜つおと

たつら〜るる又〜つちのさつて

あつら〜るるあつて〜つちのさつて

さらら〜るるおと熱のさつて

玉置玉東を詠

はものむらじりしはなほの袖  
くしこむらじりしはなほの袖

必花を人あはしめ

とすのむらじりしはなほの袖

なほのむらじりしはなほの袖

かまのむらじりしはなほの袖

市女かこむらじりしはなほの袖

一はなほのむらじりしはなほの袖

短久ゆきしはなほの袖

あまのむらじりしはなほの袖

水のむらじりしはなほの袖

まきりしはなほの袖

紫蘇のむらじりしはなほの袖

一天落月 晒銀砂

かのむらじりしはなほの袖

流るるむらじりしはなほの袖

陵王の掬かつむらじりしはなほの袖













ちかちかやうきなほさ梅ころ

おの八月十百ちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

真柳のつらちかちかちかちか

ちかちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

てまのちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

京の月あつちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

あつちかちかちかちかちかちか

三也忌 瓦全方廣と云

たゞ唯この心から十日の  
あゝ〜一日中おのこら  
小治の心は〜む〜むの月  
あゝ〜心から〜ま〜ま

あゝ〜心から〜ま〜ま

あゝ〜心から〜ま〜ま  
あけら〜ま〜ま〜ま〜ま  
お家〜心から〜ま〜ま

一箇風経路日古人のかたりのあゝと  
不及のあゝ〜ま〜ま〜ま  
あゝ〜心から〜ま〜ま  
あゝ〜心から〜ま〜ま  
あゝ〜心から〜ま〜ま

のせゆふ地のおきり休の月  
あゝ〜心から〜ま〜ま  
あゝ〜心から〜ま〜ま  
あゝ〜心から〜ま〜ま

一掃もろのる水ものちり

りる月都のあらし おまのあね

去降もろの東の正徳梅り

月若馬屋をく 湖面の月えこ

いそぎ抑く月満面の春人江

名りのあらしの 後み画を

系海紫狐糸勸進悼此系無厄

清月さるうぬささかたし

ちりせり

りる月さるうぬささかたし

雪窓心父を遠善

きしきのすかきと画もし

清りさる

声あらしのあらしのあらし

ささきもあらしのあらし

くささしとむすれさう

あらしのあらし

たりる法師 帰還居士

あらしさしをあらしのあらし

一ち清々の清涼として 解名月のあま  
史記月令亦雅とて 又  
清風は之の巻に 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に

月のよきおとろけ 中枝の  
たかおとろけのあま 良夜とて  
清らぬさかえとて 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に

あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に  
あはれ夕の清のあま 八月に





かたし平記いしちのよみ

お初の仲磨の讃

月をわらぬちよの人 星をら  
ナのおやたつ子孫をらかの声

悼燈月

うきやも月を中かき

一春日堂のそ能たまはむちのう  
友人とやうちをわらはぬをわら  
きけと成るこしこしに感ふ

かたし平記いしちのよみ  
お初の仲磨の讃  
月をわらぬちよの人 星をら  
ナのおやたつ子孫をらかの声  
うきやも月を中かき  
一春日堂のそ能たまはむちのう  
友人とやうちをわらはぬをわら  
きけと成るこしこしに感ふ

乃如のちかよき花にさかすか  
たのむもあれスる花にことごとく  
ぬれぬは是れはさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか

香花庵南草花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか

さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか

二蘭花

さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか  
さかすか花にさかすか

町のやまをさしきりて入る

堂よりおもしろき川 雨より

左逸勸進 高野山圖會の

附録 此廟のありさま

結石町御経巻の御明り

盛親僧都の画

昔よりついでにこのまゝのまゝ

いふまゝのまゝに

さあとの東のまゝに 八羽

寛政十一年未九月雪中庵葵太

空上摩居士正當十三回

追慕俳諧 両吟

月やさう今けいびき 不二庵

九月七日のあかつきのあめ大に丸

仲作の庭の萩のきつね

かけの糸のうらまゝゆき

かまじやまのうらまゝゆき

うちかゝる空の女は  
 うらひのおねもなまぢりか  
 ちかきすくきもあはれ  
 高川の糸のおねもあはれ  
 津の大船もあはれ  
 舟のさぬさつはら  
 ちかきすくきもあはれ  
 くらねのけちあまもあはれ  
 高文の月乃浦もあはれ

九 合 二 合 九 合 二 合 九

松江の徳の眼さふえあり  
 孔明机のさつりあはれ  
 けねりさつりあはれ  
 さつりあはれ  
 うつらぬおねの神利あり  
 あのおねもあはれ  
 新目もあはれ  
 高の指のほりけりあはれ  
 くらねの月乃浦もあはれ

九 合 二 合 九 合 二 合 九

日らしみちきりきり  
 松のあまのつたのつとめ  
 こゝねの鶏のあしすけ  
 けりあまのつたのつとめ  
 せせいいつえいせ  
 海鳥のつたのつとめ  
 移りしつとめ  
 遷りのいせつとめ  
 見えのつたのつとめ

二 今 九 今 二 今 九 今 二

今かしきつたのつとめ  
 花のつたのつとめ  
 くりかしてつとめ

二 九 今

右

一信まのつたのつとめ  
 そりあまのつたのつとめ  
 けりあまのつたのつとめ

上人たのしみも南無毒舌そかり  
まゝ人のそらもまゝいそゝまの建ま  
わりしは志まかひいそゝまゝいそゝま  
とまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま

のまゝい

親子の賛

親はまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま

自徳の賛

梅園やおまゝいそゝまゝいそゝま

おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま

一炊庵よりおまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま  
おまゝいそゝまゝいそゝまゝいそゝま

城の鳥居原の花を

又あらねのふかき

あけふもさしひらけしに

さしひらけしに

このやもたぬともば

月も海原のよるちか

川二流のせき

あけふもさしひらけしに

秋もあ

一うづの一番目<sup>春</sup>を

あけふもさしひらけしに

あけふもさしひらけしに

あけふもさしひらけしに

川をけし

あけふもさしひらけしに

あけふもさしひらけしに

あけふもさしひらけしに

あけふもさしひらけしに



月と花の... 完本

ふみとあし

八尋の... 栞林

あまの... 松本

あまの... 松本

あまの... 松本

あまの... 松本

ねいふ... 44 古

つひか... 天府

さ... 松本

一す... 松本

う... 松本

ら... 松本

か... 松本

お... 松本

言... 松本

あ... 松本

くわんり

後の紀多末より下とほりりり  
ぬぬまの晴もゆあひのひら  
そくしななくあり水之枯のうら  
あきなりせりき降のまぬら  
きくは八日九日十日の卯

遇坂所

又海子多末をけの山園茶を

一許六彦根侯臣木林川五助五老井又

一粟阿佛正徳五年未八月廿一日

一鬼貫横刈伊丹油か平泉氏重頼明后

宗月明郡山俊平泉三郎兵衛佛兄

元文三年戊午閏八月二日七ヶ

かいのすもを丹波国水之部柏原人

元録十一年寅八月十日けりものうけ

田氏般挂禪師受法 綱子竜明寺

自閑尼首座后大法正眼国師仕六十五



うららかにうららかに  
さびしうたなま

さしやまふささりなつるさかひら  
るるのうらふささるる

一十三夜の月と中右記長承四年九月  
十三日今夜月清一 寛平法皇今  
夜無雙の明月とゆふに  
後東ふささるる

あつげきほ代のしほ  
月とあふささるる

このうらふささるる  
人ささるる

あつげきほ代のしほ  
ささるる

九月のうらふささるる  
ささるる  
あつげきほ代のしほ

利よあはらむとてまはらむとて  
打馬のあはらむとてまはらむとて

月よ月よあはらむとてまはらむとて

京借ち田屋の屋はさき又  
りぬかりしとて地よとておれ

とて並あはらむとてのあは

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ  
とてあはらむとてあはらむとて



あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

あはらむとてあはらむとてあはらむ

名かつぬれはなほまのささ

粒々皆まき

あぢりりくうぬのさ〜  
う〜雨らさお〜ふぬさ〜  
ゆふゆふのさす後のま〜川

あぢりり〜まき

浦か〜人ぞぬれ〜

あつら〜ぬれ〜

谷奥し袖鳴る七葉のさ〜

あぢりりの細

一と考らる所の松を〜晋ふ〜  
ちらぬ酒押よわぬさ〜人ぬ

宋の宅篇〜白氏〜二千八百言  
飲酒の詩九百〜さ〜  
情入〜さ〜  
う〜さ〜  
さ〜さ〜  
さ〜さ〜  
さ〜さ〜

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

けいせいなるらふよめめたるら  
むらさきおしるしきよきしき  
らきのけりきりかいらの  
めめめめ

けいせいなるらふよめめたるら  
むらさきおしるしきよきしき

渡唐の画

多場のふの田舎のわ

一そりー三ぶのあーいーら 塔とのあま  
やからりやの西のまーき ちかあのーいふの  
雪つるふかーいさーあまーれさ  
ふに産老人の孫と一團を信まらふか  
まーあーのさああ園の作らー又  
縁とねあーいーいーいーいーいー  
老んもいーありー 大子のあま  
あーいーあーいーあーいー陣のあま  
柏舟のあま





~~~~~  
石敷子のあのかからんか

ちかすのあかす~~~~~  
おら日松のくさるる

は~~~~あ位ちの松  
このくさるる~~~~~  
ちかすのあかす~~~~~

船~~~~ちかす~~~~  
ちかす~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

あはれしき一はるるもよらぬ  
酒中結うらむるもあはれ  
娘の目よ不二のうらむる

病中吟 妻子珍室及王位

ゆらゆら月もあはれ 厨の  
しるしは 信ちるもよらぬ 宮  
りあはれ唯すこしのあはれ  
大ねりしよふのあはれ  
からの物さたるあはれ

からあはれ 厨さあはれすまの  
けいさのしるしはあはれ  
あはれのしるしはあはれ

後丹陽唐十のあはれ 今の作九  
ちち友多の信ちるもよらぬ

あはれしき 秋のあはれ  
信ちるもよらぬ

あはれのしるしはあはれ  
あはれのしるしはあはれ  
あはれのしるしはあはれ

ふもろや月を流りほくさるあ

上ノ太まほし

ふもろのけり

ふもろさふかしくけりきり花のゆ

たふもろをまほしうもろけり

ちりりさふかしくけりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

ちりりさふかしくけりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

かきりきりきりきり

ふもろのけりきりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

ふもろのけりきりきり花のゆ

新修の別巻の巻頭

うきうきやわらわりのなまぬきの月

福録壽の讚

まごのまごや人まごまごして  
ちかこの月まごまごしかへん

この月けり産まう花を山に  
めりりあつりさかひは花を  
石をまじりしもの  
月の日のぬしりのまごまごまごまご

江戸貝房勸進もまほし

果敢 聖僧のちかこのまご

やちりまごまごまごまごまご

かごまごのまごまごまごまご

まごまごや花よりたごまごのし

まごまごまごまごまご

まごまごまごまごまごまご  
まごまごまごまごまごまご

かいの周りにくらの石ころ

くらの石ころ

けしきとくらの石ころ

紫光と徳のすまや

くらの石ころ

くらの石ころ

めくらの石ころ

本居よからくらの石ころ

妹屋とくらの石ころ

あかの石ころ

南郊宗石よりとくらの石ころ

くらの石ころ

宗石

くらの石ころ

五明

くらの石ころ

大に丸

くらの石ころ

くらの石ころ

くらの石ころ

くらの石ころ

ぬ つかい

山崎の馬 ー おおぢの

馬 ー つかい

つかい

つかい

つかい

つかい

とあやうき 東坂 少将 三月 足 卯

とつがさ

人や

うつ

牛の

黄

ら

妹

くら

山

子

子

子

子

子

子

子

子

子

夕ほしあいのまよふ山家  
 たいまつふ入居の春  
 空の川流とちのあかぬ  
 春のあまのつゆのぬら  
 牡丹のさきの鐘のしほ  
 まけの雪のむらさき  
 夕ほしあいのまよふ山家  
 たいまつふ入居の春  
 空の川流とちのあかぬ  
 春のあまのつゆのぬら  
 牡丹のさきの鐘のしほ  
 まけの雪のむらさき  
 夕ほしあいのまよふ山家  
 たいまつふ入居の春  
 空の川流とちのあかぬ  
 春のあまのつゆのぬら  
 牡丹のさきの鐘のしほ  
 まけの雪のむらさき

夕ほしあいのまよふ山家  
 たいまつふ入居の春  
 空の川流とちのあかぬ  
 春のあまのつゆのぬら  
 牡丹のさきの鐘のしほ  
 まけの雪のむらさき  
 夕ほしあいのまよふ山家  
 たいまつふ入居の春  
 空の川流とちのあかぬ  
 春のあまのつゆのぬら  
 牡丹のさきの鐘のしほ  
 まけの雪のむらさき





當田極楽土東明中心

天王なるがらゝのひんがし

ひんの坂尺かのまよしとあはる

胡麻をむむ年かむしひんが

此の國をむむれまのあつてもかたの浦をりく  
えるのむらと茶屋のふのあまのまよしのひ  
つきこのむらとあつてもあまのまよしのひ  
ひんの中日とあつてもあまのまよしのひ  
中つてもあつてもあまのまよしのひ  
日想のあまのまよしのひ

あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ  
あまのまよしのひ

あまのまよしのひ

あまのまよしのひ





雲のあはれ 渡々月のかまー 大に九

痛くさすまゝ 痛くさすまゝ 御

そとらうー 秋の中らうー 松がくじ 完来

あーらうー 山の中らうー 陀岳

よみまゝ 野のうらうら 鞠つみ 九岳

らうー 朔日のさめ 来九岳

あのかげ 松島の影も 来九岳

あまのこ 泣くは 来九岳

路のぬくさ 来九岳

御座らぬらうー の 来九岳

のまねか かも 来九岳

ありらうー 桑田のあ 来九岳

はらうー 又らうー 来九岳

はまのうらうー 来九岳

あうー 口ちうらうー 来九岳

あうー 大鼓ちうらうー 来九岳

あうー のうらうー 来九岳

あうー のうらうー 来九岳

降参のえしよしもたまはるし

的まらりし姉三平

姉まらりし姉のひきまらち

ちまのちまは易かあは

玉川のあまは禪法師

枯木かや一斎の傍

まを煮る鼎しりまは

今よ藤乃のゆきまは

へこう玉のまぬおさ

今岳今来今九今岳今

さしあけしりま

まのまきりまは

まきりまは

まきりまは

まきりまは

まきりまは

まきりまは

まきりまは

まきりまは

今九今岳今二

筆二九今岳今

あきまゝにさしつけりて  
あまのまがや九月にたけ

二市鶴井原氏 住吉まじ 二カ三斗とゆゑあら  
二カ堂とつり 徳子りのゆゑまじ 山松、  
ゆゑいとむらまじつりとまじ 禄六年酉八月  
五ナニ又 宗因之明人ニ

住吉大夫敷者貞享元年子六月五日也  
此時矢見キ角也下中説ありこの一キ角也

一浪草まじまきの法中ぬるぬる  
すなへ 自由まじつりまじ かんま  
たぬも ねむるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
まじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ  
ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ ぬるまじ

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

さうから

文之部

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.



たふしくりてさしてぬのさか  
てりきし

碇正の申ありくしぬお

いけいけの軍より神山守の

兼頼とらふるをさきほりぬ

このねのさくれ品海の中よりわた

さかふるおはる中 四天まゝの

下ありさし

ちち庵とありぬ二庵

とまよこへのえりかい概り

寛政五年 十月十二日

このたのさくれこの地はるる元は元来  
ちちさくらかぬまこの塚のみ 大に丸  
わさぬ馬士のおまゝとらえて 眺居

連気 三十の事

いすくまのりるおのち信子  
おろこのしみゆりけ  
信成巻画

神依人教増感 人依神徳添運

ふかきくく 貞永之成目

十一百このあ紀又古人き

あらしきん

か 海の花も花ももりて

己のききあつちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのち

たえ國志のちのちのちのちのち

ひのちのちのちのちのちのち

而 ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

あつたかぬし... 園成程... ちか... ずみ... け... ち...

の... 石二庵... 石二庵... 石二庵...

を考へし

け... 中... ち...

え...

東... 印...

てのりいふ

子孫のよのよのつらさを  
みぢきあはせよよひきしむを  
海よりこつゆそのかこのやち折波  
わしととのわつ佳きの後

室後子吹

室後

寛政五年癸丑十月廿七日

百廻忌後身於大に隣に

六吟奇仙

あゝこの後ささくあちねし定未  
作けしつらむしうらりあさ月大に丸  
くひえあひのそめく掛あそ 哥白  
かきりひのそたうこまむ 年心  
まらあひのうらひよ声と母抱 馬肝  
あいのひまのあさかけりひ 定未  
けりよさあめあちさ古物よ 大に丸

うらなも十のとさ尾 栗白  
娘まよりとらぬあ揃はけり 午心  
紀の山 二日さよまや 馬肝  
換ましくおの本印のり 完末  
ささいゆめさる 陵のちか 大に丸  
くささる 喉のその 庫の月をみ 哥白  
みれば 狂へ 進上の 死 午心  
すさ 涙も 涙さる 春を 馬肝  
世あも すす 筒をか ぬさ 完末

くらのつらぬ 雨さるさ 山は 大に丸  
蜀を 鬼を しささ 声 哥白  
ひげさ 自問 自答の ささ 午心  
きぬ けり 驚き けり 馬肝  
かつら けり 驚きの 大恩さ 完末  
きけ けり 驚きの 大恩さ 大に丸  
ゆき 鹿の けり 物さ 完末  
味と 目の ささ 大さの 午心  
とや 夕方の 糸の けり 大に丸

年より春ふ丹結の土戸 可平白  
あゆめるやあつしはぬえ 馬疔  
おのゝき着のうもちさほち 定来  
ゆさびやり侍。月もうつ 年心  
あまうつせこのまをゆの中 大に丸  
笠人のかつこ古さゆん尻 哥白  
いつらゆかちもきささちと尻 馬疔  
さいえらのけのちとさしは 定来  
日を年みある。七曲の山 年心

あつしはぬえ 不二  
もともちささちと尻 靴子  
右

あつしはぬえの由法  
一袖ええはぬえの九月りせりまの一  
呪えし けさゆのきふちり連流と

- 芭蕉 支考 惟中 園女
- 汎舟 涉川 何中 惟然
- 舎羅 洒堂 十人



うまのうま

あつた人のなまをわらわらあつたのさ  
うつれぬかー信解きもたつたのさ  
才馬のあつと二つと花やらうまの  
あつたもあつたうまのあつたさ  
あつたあつたのあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

又うまのうま

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

具外掛りる法要之式百箇のたつた  
又雪中完来義仲寺その物吟あつた  
両庵の系あつたあつたあつたあつた











かきつゝもさるる

千日之御

馬之田一羽

鹿之御

三原のい

きまもす

きまもす

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あつちのうらやま

清國のうらやまのうらやまのうらやま  
えいごのうらやまのうらやまのうらやま

ちいさなうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

民のうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま  
うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま  
うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

一天の自<sup>び</sup>言<sup>ひ</sup>を<sup>て</sup>具<sup>は</sup>珠<sup>は</sup>え<sup>は</sup>流<sup>る</sup>の<sup>は</sup>正<sup>風</sup>  
を<sup>も</sup>た<sup>し</sup>角<sup>の</sup>海<sup>は</sup>さ<sup>ら</sup>不<sup>角</sup>の<sup>化</sup>調<sup>子</sup>  
よ<sup>も</sup>保<sup>り</sup>は<sup>州</sup>の<sup>味</sup>を<sup>の</sup>色<sup>を</sup>馬<sup>を</sup>こ<sup>ゆ</sup>  
い<sup>や</sup>ゆ<sup>え</sup>ふ<sup>り</sup>は<sup>の</sup>信<sup>を</sup>か<sup>り</sup>湖<sup>十</sup>の<sup>ほ</sup>そ  
ち<sup>の</sup>流<sup>り</sup>は<sup>お</sup>れ<sup>一</sup>人<sup>の</sup>さ<sup>か</sup>ら<sup>あ</sup>り<sup>は</sup>  
こ<sup>の</sup>下<sup>の</sup>誹<sup>諧</sup>や<sup>こ</sup>の<sup>原</sup>ら<sup>は</sup>  
ふ<sup>れ</sup>ー<sup>ゆ</sup>さ<sup>さ</sup>め<sup>の</sup>う<sup>は</sup>ら<sup>は</sup>か

戦場の雪

あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>

さ<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>り</sup>甲<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
馬<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>母<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>  
か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>母<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>  
ち<sup>り</sup>は<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
建<sup>涼</sup>傳<sup>の</sup>ち<sup>り</sup>は<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
雪<sup>の</sup>ち<sup>り</sup>は<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>し</sup>

さきよ授けぬも千ねんあいの誓  
わらこがーちるるぬこーまきりん

雪井のきりん

きぬちや仲国とあまのまよ

ひもあうまかきまよのゆい

まきのきよかーぬの君九人

一貞徳芦のぬゆりー痛まて法華經

一千巻ゆゆもゆりゆーゆーゆー

たうのらもまぬほゆまゆま

まよーまよの山月と人のあつち  
うらちぬかきまゆまゆまゆま  
まゆりけゆのまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま

まゆまぬあつちまゆまゆま



皆具其師の法なり

南無三寶 諸天善神

慶安三年庚寅正月廿八日

白

いふ人あはれもあはれも  
#さあはれもあはれも人の  
みもあはれもあはれも  
何さあはれもあはれも  
はらあはれもあはれも

更記 清言傳之 清言猶俳諧と云

清言は其の人さからしむけし  
去偏の人さねねたあはれもあはれも  
れらあはれもあはれもあはれも  
こはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
人のあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも

信了賢 東方朔優 孟優





ちん せん せん

あまのこころをいかにせんはしむる  
よのちのこころをいかにせんはしむる  
かんきゅう 玉子 せん せん せん  
このちのこころをいかにせんはしむる  
きん せん せん

利休 せん せん

せん せん せん せん せん せん

から せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん  
せん せん せん せん せん せん  
せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん  
せん せん せん せん せん せん  
せん せん せん せん せん せん







あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を  
あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

こゝろ朝日

えこまけの 峰に 雲の影を

画師 悼法橋 関月

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を

あつらひしつゝ 月夜に 雲の影を



孝子

孝子の徳は母を孝かせり  
老母をえり陸のひくもあまこ  
人徳のしゆくをのとおらうに  
かのしゆくをのたか  
徳くしゆくをのたか  
孝女自らしゆくをのたか  
孝子のしゆくをのたか  
孝子のしゆくをのたか

フナ

孝子の徳は母を孝かせり  
老母をえり陸のひくもあまこ  
人徳のしゆくをのとおらうに  
かのしゆくをのたか

孝子の徳は母を孝かせり  
老母をえり陸のひくもあまこ  
人徳のしゆくをのとおらうに  
かのしゆくをのたか  
孝子の徳は母を孝かせり  
老母をえり陸のひくもあまこ  
人徳のしゆくをのとおらうに  
かのしゆくをのたか

あつてくるるきふゆのこころを  
まのあたりの同くはるやその雨  
あつたやまの川糸のほひを  
いふもくせいのさしききさし  
さちこちふふのこころを  
そのゆりむと探るりのれをさるる

二嵐雪膝部氏 喜名久米之助 住濱町

雪中庵 不白玄峰 居士

宝永四年丙亥十月十二日 五十四才

一さるる雪のふゆのこころを  
あつたやまの川糸のほひを  
いふもくせいのさしききさし  
さちこちふふのこころを  
そのゆりむと探るりのれをさるる

あつたやまの川糸のほひを  
いふもくせいのさしききさし  
さちこちふふのこころを  
そのゆりむと探るりのれをさるる

許すのし 靡こちりし かねて  
ぬめさる ちかひの おこり なる  
かこさる ねえ ねえ もうと なる  
おのの ねえ ねえ ねえ ねえ  
しる のい ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
よめ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ

さか ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ

ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ

ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ  
ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ ねえ



浦見のそ花 ききと 誰の五石月

牛産すま福高の外竜掛り  
か相よりうりこ人はありし中一のうり  
わめこのなかり也

をくそ疾くて乾く程のほろいほ

をくこのすまきへゆくまをり

淀よりとりあがりなまをり

而目坊海ゆり ちまこり

五石とあのみからちまこり

一 蕪村 竹と矢討氏 生國 楳列 東成 郡

毛馬村の産谷氏也 丹後のちたのんがひ  
天馬ちのんがひ

村々師讀あり 江戸内由 沾山の 倚り 後 四人

宋路の明人 とまり 夜半亭とりの 俳と 明人

はまをいしり 思を 月陰の 傳ふ 終末 一 乘

寺邑の金福寺 ききと 師庵の 名 坊と 身

まろり 別号 長庚 三果 春 呈 紫 嵐 庵

又 寅 ふ 天明二年 卯十二月 廿五日 没寸

七 拾方 俳道 画道 とよ一 寄を ちりく 子

常々此の事申すに及ばぬ程に  
遠慮の心はなほありて  
御事なきに似たり  
石所のりしもの  
寛政九年巳十月二十日  
今京師の事  
画たり  
名

すゝ日不この押さみり  
すゝし暇せは  
後ちおの  
判  
八日  
お



ほろりえてはうらさまの春分  
あけぬさうの春分  
後あけしはうらさまの春分

一好のこらゆる御まの  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分

在立中將の御まの

あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分

あけぬさうの春分  
あけぬさうの春分

中島の御まの  
あけぬさうの春分

竜明意の御まの  
あけぬさうの春分







仰て由平子道を学おたて奉り  
宗周の師へ魁貫と友へたり平日  
キ角子志をなへし所を今宮村よりけ  
十乃堂と名く享保元年申十月三日  
皮寸六十三才一名信々羽多岐小島守志  
と名給ふ是命も此所をす終りて  
白きまの連続し四作り乃いかく  
たつたのりりたるまはまはらぬと  
紙面らの名も各々そまらぬ

安政のせらふし 毎世より 紙面ら  
よい画り 不之尾の落し

紙の白せりし 土塔のまを

ゆめつとを燃へちやらふのち

みの田可世重不持 夜半真のま墨

定持をいひきや 老の破日

この紙をいふは 依以物尾 継部承へ

園ををいふは 依以物尾 継部承へ

千金をあらへ万宝もあらうらん 去

一炊のこころみ

月も白も王侯も谷りこたごみ 一炊

ほのきもまたやとめの四五目ち

ささのこころみ

陸国もかかしの白くみるさめ

ささのこころみ

おまの雪もぬきあつちんぬ 月ぬ

ささのこころみ 月のおも 去

ささのこころみ

ささのこころみ

ささのこころみ

射とぬきもまきし 札ぬぬ

人ささのこころみ

大子ぬこのころみ

たさのこころみ

鬼ありしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり

先驢伏櫪志在千里と大に老人の

東適禪師

りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり

りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり

りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり  
りまらりしりまらりり けらり

Shōmei

おのつゝもあせりやう志

天府

海苔も移りやうあせりやう

大に

甲寅

しきれともぬきく旭の卯

大に

あつてふすみやうの胃

不二

つちの年

天府

山男よ海苔のみるさあ

天府

あとのるさうしつちの卯

月居

さうして万歳く萬之歳

大に

七廿九

巴未

さうもほくろもほしほし

牛心

おろしあり馬明

大宛

ちみりりまきかか

あひらうつたふ

三井のちま



Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry, covering the left page of the notebook.

Handwritten text in cursive script, continuing from the left page, covering the right page of the notebook.



Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the left page of the open book. It begins with a large character that resembles '大' (Da) and continues with several lines of fluid, connected characters. There are some faint markings and a small mark that looks like '中略' (Chūryaku) in the middle of the text.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written vertically on the right page of the open book. It starts with a character that looks like '大' (Da) and continues with several lines of fluid, connected characters. The script is consistent with the previous page.

Small vertical text or mark located between the two pages, possibly a page number or a reference mark.

我存現の時乃凡よかきしきし  
 さあしハあしきの真かよけふふし  
 なまあよのち向何事、如えや  
 おる真徳未は記の初の時  
 好愛の心をしししけふふし  
 跋し句

フ四十二



大江九藏板  
 每部此印

享和元年辛酉二月

江戸 野田七兵衛

大坂 塩屋忠兵衛

京都 橋屋右兵衛

梓

